ひ　美術の時間を共に学ぶ

生駒南中学校で 3 年生を担任していたときのことです。担当授業時数は理科とホームルームの計 25 時間（一時的には 29 時間だったときがありました）でした。そう多くはない空き時間が私の学級の美術の時間に当たっていました。

教材研究や実験の準備は別の時間に集中してすることにして，

「私の学級の子どもたちといっしょに授業を受けさせてくれませんか」

と美術担当のＮ先生に頼んでみました。

「いいですよ。来てください」

ということで，次の週から美術室に行くことになりました。

チャイムのあとの「起立」と「礼」，そして，Ｎ先生の美術の授業が始まりました。私も，真面目な生徒として授業を受けました。その時間から始まった新しい課題は，友達の顔を水彩で描くことでした。2 人ずつが組になってお互いの顔を描くのです。

私は 2，3 日前に転入してきたＴ君と組になりました。それから，3 週間ほど，毎週美術の時間になるとＴ君と向き合って互いの顔を描きました。週 2 時間の美術の時間にはたくさんの話ができました。前の学校のことを聞きました。この学校のことを話しました。Ｔ君は，とても早く学校に慣れてくれました。1 か月を過ぎたころには，初めからこの学校にいた生徒と同じでした。いや，それよりももっともっと親密さを感じ，互いの気持ちが分かりあえるようにさえ思えました。そして，翌年の 3 月，Ｔ君はみんなといっしょに元気に卒業していきました。とても楽しい学級でした。

この学習の次は「左手を彫る」が課題でした。珪藻土のブロックを

素材にして彫刻するのです。直方体の各面に，それぞれの方向から見た絵を描きます。それができたら，不要な部分をのこぎりで切り落とすのです。私はゴシゴシと頂点の部分を切りました。三角錐が８つ取れました。Ｎ先生が，

「やっぱり先生もやりましたね。みんなが間違うところです。絵がない部分を三角錐のように切り落とすのではなく，辺に沿った三角柱を切ればいいでしょう。この絵がないところは何もないのですから」

と言うのです。なるほどと感心しました。

子どもたちといっしょにがんばったこの作品，Ｏ先生の表現によれば，中に潜んでいる形を掘り出すという作業のあとに残ったこの作品です。決してうまくはない作品ですが，自分で作ったものには愛着があります。長い間，家に飾っていたのですが，生駒台小学校の「でんしょばと」第 36 号に書くために，この「左手」を持って行きました。

校長室の掃除に来てくれた 6 年生の子どもたちがこの作品「左手」を見つけました。

「でんしょばと第 36 号に出ていた左手ですね」

「うまくできている」

「そっくりですね」

「校長先生が買ってこられたものとばかり思っていました」

お世辞も相当入っているとは思いますが，子どもたちがほめてくれました。ほめられるのは，いくつになってもうれしいものです。

「これは，何から作ったのですか」
「木を彫ってあるんですか」
「私たちは粘土をくっつけて作ったけど」
「くっつけたのは後で取れるけど，削ってしまえば，おしまいだね」
「なんといっても，彫るほうが難しそうだ」
「だから，小学校では彫って作るのではなくって，粘土をくっつけていくんだね」
　何か形のあるものを作るときには，削ったり，くっつけたり，練りあげたり，切ったりします。教育にもそれとよく似たところがあるのではないでしょうか。
「こんな力が身につくように」
「こんなことも大切ではないかな」
と考えて指導します。彫塑で言えばくっつけることになります。
「これはおかしいよ」
「これはまちがっている」
ということについては修正をしていきます。彫塑で言えば削りとるということになるでしょう。
　これは教育の大切な営みです。けれども，くっつけすぎて元の形を無くしてしまったり，削り取ってしまってどうにもならないようになったりしては大変です。
「こうしなさい」「ああしなさい」とか「それは駄目だよ」「こんなことをしてはいけません」といった指示が多すぎないだろうか，子どもたちとの会話の中から，こんなことを考えた掃除のあとのひとときでした。